

新訂版 黒色戦線社

アナキスト 革命

ジョージ・バレット
鈴木靖之訳

黒色戦線社出版案内

<人類更生の大道アナキズム研究書>

- 大杉栄ら発行無政府主義新聞 労働運動 復刻 価 5000円
- 純正無政府主義 史料社会革命講座 八太府三著 価 150円
- 階級闘争説の誤謬 八太府三著 価 130円
- 無政府共産主義-人類解放の道-八太府三著 価 700円
- 無政府主義組織論 マラテスタ著 価 100円
- 選挙戦に際して-付録伝一- マラテスタ著 価 150円
- 農民の中へ マラテスタ著 価 200円
- マフノの農民運動 石川三四郎著 価 150円
- ヘルテロー 著 山田 泰治訳
- 平民の鐘-無政府の福音- 価 150円
- 無政府主義者は答える 岩佐伴太郎著 価 150円
- 石川三四郎著 伝記
- 日本無政府主義運動史 第一編 価 350円
- 反逆者の牢獄手記 大杉・林組の十二民著 価 200円
- 獄窓から-増補決定版- 稲田久太郎著 価 800円
- 死刑囚の思い出-増補決定版 吉田大次郎著 価 700円
- 一・二・三 稲田久太郎事件証言記録一
- 天皇制破壊への激動 価 300円
- 稲谷雄高氏の天皇批判の証言収載
- 雑誌労働運動(大正3年3月号)発禁を復刻
- 大杉栄・伊藤野枝追悼号 価 400円
- 漫文・漫画 大杉栄・宮月社共著 価 500円
- 自治民範(全) 稲田成徳著作集 第一巻 価 3000円
- 正義と道徳 クロホトギン著 佐藤生高訳 価 250円
- 難波大助大逆事件 鹿ノ門で現天罰を狙撃 価 900円
- 弁証法的唯物史観の批評 石川三四郎著 価 150円
- 無政府主義とサンシカリズム 石川三四郎著 価 150円
- 進化と革命 補正版 竹石川 編著 価 150円
- ルタリニニ 石川三四郎著 価 150円
- 何か私をこころさせたか 金子ふみ子私中学記 価 2000円
- 稲田成徳著作集2 史料自伝論・日本革命史論 価 3000円
- 大杉栄秘録 稲田千代子19代 価 500円
- 無政府主義論 金子ふみ子・マラテスタ 価 300円
- アノキスト 石川三四郎著 稲田成徳訳 価 3000円
- アノキスト革命 金子ふみ子著 稲田成徳訳 価 150円
- 雑誌 労働運動 大杉栄(50円)
- 雑誌 黒色戦線 (50円)

(送料本社もち)

理論・情報誌複刻・・・

思想文芸誌複刻・・・

黒色戦線社

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田 電 0270-24-0776

郵便振替口座 宇都宮 11015

資料、編集、共学読書会室

〒144 東京都大田区西蒲田7丁目61番8号エンリコビル3、4階
国鉄蒲田駅西口下車、蒲田銀座アーケード街歩いて3分、突き当り
左隣、毎月第2、第4日曜午後1時より共学読書会、初心者歓迎。

¥ 150

黒旗叢書第2輯



ジョーチ・パレット著
鈴木靖之譯

アナキスト革命

一九三〇年 黒色戦線社版

昭和五年五月十五日印刷
昭和五年五月二十日發行

【定價拾錢】

写真は〈アナキスト革命〉

初版当時（1930年）の表紙と奥付

著者 鈴木靖之

發行兼印刷者 東京府下武蔵野町吉祥寺二六三一
星野準二

印刷所 東京市小石川區林町四三
スナホ社印刷所

發行所

東京府下武蔵野町吉祥寺二六三一

黒色戦線社

（振替東京一五二六四番）

アナキスト革命

新訂版・黒色戦線社

小序／鈴木靖之———2

序———3

1 労働運動———5

2 なぜ我々はアナキストであるか———8

3 直接行動———11

4 新社会———16

新訂版あとがき———24

George Barrett,
THE ANARCHIST REVOLUTION.
Freedom Press, 1920
(Freedom Pamphlet)

小序

この『アナキスト革命』は僕が軍隊生活中に読んだものだ。

夜中にライフル銃架の陰で剣を磨くものがあつた。その外側では外套をかぶってこれを読んでいる僕がある。どっちも夜中にやっちゃいかんことだ。が、僕の方はとりわけあぶない仕事だ。しかし、あやつらが嚴重にすればするほど、こっちは嚴重にやる。で、やろうと思えば何でもやれるのだということを知つた。

とにかくこの書は、『オブゼクシオン・オブ・アナキズム』と共にジョージ・バレットの著として広く知られている。『オブゼクシオン……』の方は岩佐氏の『無政府主義者はかく答う』として訳されている。この書はまだ出ていないが、この頃しきりに問題になっているようだ。僕らのものとしてはいい書だ。これで見ればバレットは決して階級闘争説などにコッてはしない。いやむしろアナキスト革命のためには、そんな説など大して問題じゃないというのだ。

貧弱な語学の力で辞書を相手にやった仕事だ。それは軍隊だの停車場でやったものだから雑駁なことはいうまでもない。まあ我慢して読んでもらおう。

昭和五年三月

鈴木靖之

ジョージ・バレット著 鈴木靖之訳

アナキスト革命

序

アナキスト（無政府主義者）とは、政府が民衆のために有益なものだとは信じない者のことだ。彼は自由を尊び、そのために闘う人間である。自由は彼にとって迷信ではなく、想像がつくり出す神でもなく、行動の実際的な理論やあるいは計画である。自由を建設するのに必要な第一歩は明らかに、政府の廃止である。そしてこれはいかなる外部的な力によってではなく、労働者自身による産業の組織を意味する。——いいかえれば、これアナキスト革命である。これはとてつもなく不可能だと考えられるかもしれない。だがもし我々がそれにわずかの考察を与えるならば、この疑問に新しい見解が出てくるだろう。

まず第一にそこには、まったく不当な、君の観念を混乱させるあるものが存在していないだろうか。なぜなら君はアナキストではないと私は想像するから。

君は我々の社会生活に必要な一部分として政府を信じている。そのくせ君は自由を否定したり排斥するようなことに言うのさえ好まない。これはアナキストでないほとんどすべての人がそうなのだ。——彼は、彼らの政府を弁解するために知識の半分を費し、他の半分の自由を愛するための弁解に費している。政治的信仰に関する彼らのその態度はまさにクリスチャンの宗教的理想についての態度と同一である。クリスチャンはキリストの栄光のために教会を建て、そして彼を崇拜する。彼に反対する者は嫌悪される。だがそれが実際生活になると彼らの宗教どおりではなくなるのだ。「明日を思い煩うなかれ」ということを、「銀行にはほどよい残金を置け」と翻訳し、「汝殺すなかれ」は「陸海軍備のための年々六千万ポンド」となる。「裁くなかれ」そして「誓うなかれ」は法廷で彼らが宣誓する裁判記録の中に書き込まれるのである。「汝の主人と呼ばれる人なし。それはすべて汝の兄弟なればなり」とはストライキの時に、兵士は彼らの兄弟たちを射ち殺して、彼らの主人を護らなければなら

ぬという意味に解釈されるのだ。このように、キリストによって教えられたあらゆる点が、彼を崇拜する人々によって排斥されているということが証明できるであろう。自由に関しても同じことがいえる。

我々は民衆として自由を尊ぶ。我々の誇りは、「イギリス国旗の流布するところ自由は至尊である」ということだ。我々は自由のために像を建て、我々の詩は自由の榮譽をたたえる。わが政治家らは自由を讚美するに麗句をもって我々を感じさせる。しかしそれが実際生活におよぶ時、これらの内の何ものも彼の理想には適合していない。「我々は政府を持たねばならぬ。我々は支配する者を持たねばならぬ」と彼らはいふ。これらの言葉の背後には、政治家共の社会理想を打倒しようとする叛逆者を射ち倒すために用意された警察官の警棒や牢獄制度や軍隊が隠されているのだ。自由は語るには美しいものである。だが実際政治のためには彼らは政府を要求するのだ。

いまや我々はアナキストが出現するところを観察しはじめよう。彼は真に自由を信じ、先に述べたごとくそれは政府の廃止を意味することを知っている。

政府の信じている人たちはその理論において、すでに

混乱に陥っている。しかし読者諸君はまだ政府を打倒するのはまったく不可能だという意見で見ているかもしれない。それが事実なら他のいかなることも不可能だ。

すべての歴史は我々に、支配または統治階級と、それが命令を下すところの人民との間の闘争を示しているではないか。また歴史は、進歩はいつも政府とは離れて自由の方向にあることを示しているではないか。

我々の生きるこの時代そのものが示すより以上ににかもつと、政府の無能を指摘する証拠があるろうか？

生活の可能性は非常に大きくなり、自然の富の獲得はいよいよ完全になってきたので、我々は要求さえすれば十分生活のよろこびを受けられるだろうと思われ。我々の子供の頃のとっぴな空想話が、今日現実によってうちをかされている。我々の想像は実体化された。もつともすぐれた考えが行動の中につされた。これらは人類の個人的・社会的偉業である。

活動が単一の個人によってではなく団体によって営まれているという理由によって存在している社会機構の上に、政府といわれる、人々の集団がある。それらの人たちは最大限度の教養があり、またその制度が提供し得る教育の最大の利益を享受する人たちである。

しかし生活をより豊富たらしめるために建設された社会の、この驚くばかりに整理された結果として、はたしてどんな利益があるというのか？ 幾百万の人間は飢餓に

せまられ、また幾百万の人間は生活のために生産機構の中で彼らの生命をすり減らしつつある。そして幾百万の者はまた、あいもかわらぬ悲劇の間あってその存在を荒廃させつつある。富がもつとも豊富に生産される、あらゆる大工業の中心に欠乏と貧困とがある。生産しない都市には豊富と安楽とがある。苦しい労働をしたり富を生産する者は貧困の中にあり、ぶらぶらなまけて暮している者は富んでいる。倉庫が満たされる時、そこには欠乏と飢餓とがある。食えないでいる者は生産を禁止される。それは富者の需要がすでに満たされたからだ。

まったく政府は何をしているのか？ 政府は制御し統制する——あたかも生産は自身では順序よく進行しないかのように。政府はこの生産に必要なすべての財産を保護する。生産者ではなく、何も生産しない者を保護する。それを必要とする人たちのためには保護を確保せず、すでに富んでいる者を保護するのだ。——かくて貧乏の問題がおこるのである。

それらの事実を前にして、政治家らは何をいうことが

できるのだ？ 社会主義者から保守党员まで、彼らはな

さけ深そうに、弱々しくいえるだけだ、我々に権力を与えよ、そうすればより良くなるだろう……と。

このように、社会の平衡を乱す政府のやり口を看破しなければならぬ。それを批判しなければならぬ。

そしてこの批判は、特定の権力集団のみ目指すものではなく、制度そのものに向けられなければならない。習慣は実に我々の心をマヒせしめる不思議な力をもっているが、もし我々がそれを常に正しいと信ずる馬鹿げた考えをやめ、それに対するに自由社会の可能を以ってするならば、おそらく真面目に政府制度を撰べる人を信ずるのは困難になるだろう。

1 労働運動

我々アナキストが過激論者だということは、まったく真実である。我々は社会の秩序に完全な、徹底的な変革をもたらさんと欲する。その変革は現存諸制度を猛烈に攪乱し、転覆し、ほろぼし、そのかわりに自由社会の諸制度を建設することによってのみ、完成するのだと信ず

る。我々は革命を信ずる、単なる政治革命や立憲的改革ではなく、社会革命を——一つから他への関係の完全なる変革をだ。

たとえば将来社会においては、貧民の生産した富を貧民自身に棄てることを強制した権力と法律が一扫される以上、富者が貧民を困窮の中にとどめることはなくなるだろう。「その結果は混乱するだろう」と無思慮な人々はいう。しかしもし彼が、その唯一度の人生のあらゆる日を雇主の前でペコペコ頭を下げるかわりに、自分の目で周囲をよく見まわしさえすれば、彼が生きている今日が、混沌のただ中にあるということを知るだろう、そしてその混沌は、地獄からやってきた悪魔にとっても気に入りの世界であると思うほどであろう。

しかし私たちは一番簡単な点からすべてを見てみよう。まず労働運動を研究しよう、労働と資本との間の闘争とは何かを理解すること。これはあらゆる大工業の中心において起こりつつあることである。

多数の人々が、巨大な工場で富を生産しつつ毎日を費している。これらの工場は彼ら労働者のものではなくて資本家または株主と呼ばれる者の財産だ、と法律はいう。それらのたいいていの建築物は周囲に高い塀をめぐらせ、

ただその所有者が好む時以外は、労働者は勝手に出入り

できない。これが、多くの面倒をおこす原因なのだ。労働者は一週間のあいだ工場に富を生産し、そして食料や衣服等と交換することのできる、貨幣と呼ばれるものを与えられる。ただし彼らが生産した富を買いもどすために充分な金はけっして与えられず、その残りは資本家のものとなり、それは利潤と呼ばれる。だから利潤とは労働者によって生産され、それに対して彼らが報酬を受けていない富の一部分である。

近年これについての騒動は限りがない。労働者のある者はこれを強盗だと言っている。「我々はすべての富を生産したのだ」と彼らはさげすむ、「そしておまえは我々の生産したものを盗んだのだ。それゆえおまえたち少数の資本家は非常に富裕となり、我々の創造した富を享樂する。反対に幾百万の我々は貧困とたたかい、すべての生活は荒廃させられている」

ここにおいて、中産階級や社会の八尊敬すべき人たちは、上品な、そして苦しそうな表情をする。そして社会主義者や無政府主義者や極端論者によって労働者がいかに誤まらせられたかについて、政治経済の専門家をし

て教えさすとす。「君はまちがっている」と彼らは説明すと。
資本家の答えのもう一つは、地方のすべてにわたって警察力を強固にし、そして軍隊にストライキを一撃のもとに打倒できるように訓練することである。

これが今日の状況である。労働者の生産したもののほんの一部分を支払うことによって資本家は富を獲得し、残忍なる力——警官の警棒と軍隊のライフル銃——によって保持されるのである。しかるにこの国の前首相によれば、千三百万人が飢餓に瀕しており、失業した数千の者が飢えているというのに、生産の手段からまったく隔離されているのだ。この天下の形勢が、社会の八尊敬すべき人々・政治家・牧師・実業家等から平和とよばれるのである。そしてそれを打倒し、民衆のために富を奪還しようとする、いかなる計画も平和の破壊と考えられる。謀反人は軍隊によって射ち殺され、また警官の警棒をくらわされる。

さて、社会主義者と無政府主義者の意見を検討してみよう。

近代の議会主義的社会主義者は、資本家が労働者の労働条件を支配する、この力が悪いのだということを知っている。そして彼は、資本家階級は廃止されなければな

る。「たとえ君が我々の工場で労働を提供したとしても、我々は資本を投下したのだ。君らは我々の機械や建物を使わずに、どうして生産することができるのか。君はもっと穩健でなければならぬ」

「しかし！」と労働者はさげすむ、「我々はそれらの機械を生産したではないか。かつて作られた最初にいたるまで、我々によって生産されたものなのだ。所有者としての君は絶対に何もしなかった。君は不必要な貨幣——それをもって君は我々を瞞着するのだが——その金さえ我々が土中から掘り出し、君らのために型にはめて鑄造したので。で、我々労働者は全世界の富を要求する、なぜなら、それを作ったのは我々だから」

これに答えるのに資本家は二つのことをする。彼は労働者に友達のような素振りをみせて近づくと、「我々は利益を分配しようか」と彼はいう、「何はともあれ我々はおととおとなしくやろうじゃないか。君はもっと穩健になることで君の望みを遂げ得るのだ。資本家と労働者が親しくするために協調会を作ろうではないか。我々はすべて兄弟だということ覚えていよう。特に、流血を未然に防ごうではないか。我々はそのために、議会に出席する諸君らの代表に毎年四千円を与えることに決定した」

らないと論断する。だがその方法に關しては多少の疑点がある。たとえそれが成しとげられたとして、今まで資本家を利した国家は産業に手をのばし、そしてあらゆるものは政治家に支配されるだろう。もちろん、この一般的国有化が実行された時、社会主義者は彼らの党が権力を握ることを望んでいるのである。むしろ彼らは、他のすべての政治家が約束したごとく約束する、自分ら現在の制限選挙にかえて、いくつかの異なった制度が構想されている。大部分の社会主義者が望むのは成年に達した者の誰でもが投票でき、そして選挙区は現在のように単に地理的であるよりも、むしろ職業別に区別されねばならないとするのである。

この国家制度あるいは政府の支配に、我々アナキストは全然反対だ。

資本家は悪である。何となれば彼は資本家だからである。もし彼が我々の一人であっても、または我々の兄弟であっても同じだ。彼の資本家としての力は終滅せしめねばならない。ここまでは、我々も議会的社会主義者と一致するというのが諸君にはわかるだろう。しかしここで権力を持つもの、すなわち政府について考えてみよう。

しているのは驚くべきことである。たとえばここに、課税の問題について、いつも極端な熱心さで議論している人々があるとす。ある者は輸入品に課税しなければならぬという、一方ではそれはただ我々の食料の代価を高いものにするだけだという。両方の側からはてしなく事実と数字が出され、そしてこの問題は国家的な重大問題の一つとなっていく。

さて無政府主義者は、物事のはじまりを考えるとところから出発する。いったいどこに課税されるべきかと論争する前に、そもそも課税とは何か、誰が他人に課税するいかなる権利または理由を持っているかについて検討した方がよいと提起する。

おなじく投票についても、我々はこみいった議論を見出す。法律にしたがうかぎり、投票に参与する権利を持たねばならぬという主張のもとに、女性たちは雄々しき闘いをおこなっている。一方では投票箱のカギを握っている男たちは、投票を承認するとかしないとかいうことが真面目な国家的重大問題とされている。これらの人々は、問題のはじめを考えず、その途中から考えはじめたのだ。誰が選挙権を持つべきかについて、もっともたしかな意見を有する人々のうちで、投票とは何か？と尋

う。前と同じ推論をこれに適用すれば、すなわち資本家だから資本家は悪である、という論理と同様に、政府だから政府は悪であるという結論が得られる。たとえ我々の階級の仲間または兄弟であっても、その者が政府を組織すれば、ちがいはなくなってしまうのだ。社会主義国家において完成されるであろう権力は、その政府に悪弊を与えるだろう。資本主義制度は悪である、だからその資本主義制度の一部である政府の制度は廃止されなければならぬ、将来の社会の自由連合に位置を与えるために。

しかし、政府は廃されなければならないという結論に、なぜ我々がそんなに早く到達するのかとい尋ねられるかもしれない。そしてこの質問は、なぜ我々はアナキストであるか、と質問するのと同じことである。で、次の章でそれに答えなければならぬ。

2 なぜ我々はアナキストであるか

むずかしい政治問題の基礎にある、単純な問題については考えず、人々がそのむずかしい政治問題に頭を悩ま

わた者が幾人いるか？

すべての重大な政治問題について事情はそうなのだ。誰がアイルランドを支配する権利を持つかと議論する時、我々は、ある者がなぜそのような権力を持たねばならぬかという疑問からはじめる。彼らが地主に課税することを語る時、我々はたずねる、「なぜ地主が存在するのか」と。

このように政治家たちがこむずかしい議論で頭を悩ませている間に、革命家は何が真に根本的であるかをのみ考え、それによって精神を完全に明確な状態に保ち、社会的事実をそのもっとも簡単な点から考えはじめることができるのである。

事実、政府は単に支配階級の執行委員会である。課税はその財政の根源である。政府は地主と資本家のために土地と生産の手段を保有し、生産にたずさわる者みずからがそれを所有することを妨げる。もし現在の資本家階級のかわりに、政府によって任命された一団の官吏が我々の工場を支配する位置にすわるなら、それは革命的変革をもたらさしめないだろう。官吏は報酬を受け取り、しかも特権づけられた位置にある彼らは多大の報酬を望むだろう。政治家は報酬を受け取り、しかも我々はす

に彼らの性癖を知っているのだ。生産者が生産手段を使用することに規制を加える、非生産階級が存在し、これこそ今日の社会制度の悪である。そして国家支配によって救済されることはなく、かえって新しい紛争が生ずるということをお我々は知るのである。

政府の支配によるいかなる制度も——すなわちアナキズム以外のいかなる制度も——政治家共が考える八理想社会Vを民衆に押しつける以外になにごともし得ないのは明白である。たとえ我々はここで、完全に理想的な社会主義国家を想像してみよう。ここでは議会の代議士はこぞって一致し、彼らの唯一の目的は社会の幸福ということである。すべての委員は、政府、執行委員会、官庁、あるいは何と称される所であろうと、二大義務について一致するだろう。その一つは生活の必需品が供給されること、他の一つは労働者の正当な労働条件を確保することである。ところで、何が正当な条件かについて労働者側と政府と意見が一致しないと仮定しよう（なぜなら労働者が工場を見るのは、政治家の立場とやや異なっている）。その場合どんなことになるか？ きつと政治家らは彼らに不当と思えるその条件を承認することを拒否する。労働者たちはストライキに入る。そして彼ら

は生産物資の不足をまねくことに成功するのだ。一方政治家らはこの物資の生産供給について責任がある。少数極端な労働者たちの無法な行動のために全社会を悩ませることはできない、と考える。彼らの不可避的な結論は、ストの参加者たちを強制的に工場へ還らしめることである。

この一事からでも、国家的社会制度のもとにおいては今日の資本主義下であれ、完成された社会主義国家の政府支配下であれ、被支配と支配、労働者と支配者との本質的關係は同じであることが明らかになる。そしてこの關係は当の制度のつづくかぎり、軍隊のライフル銃と警官の警棒との血なまぐさい残忍さによってのみ維持されるのだ。

新しいブドウ酒を古い革袋に盛ることはできない。労働者の服従を基礎とする現社会制度は破棄されなければならぬ。なぜならこの制度には新社会を建設する、自由の精神がすこしも保持されていないからだ。

我々の主張をさらに証明することを望むなら、それはアナキストにむかってしばしばなされた質問のうちに出せるであろう。すなわち、「君は、働きたがらない者をどうするののか？」。もちろん質問者である政府側の

人たちが一般社会主義者は、それを取り扱う方法を持っている（すなわちアナキストではない方法——それは権力を除きたいかなる方法でありえるだろう）。スト参加者は働かない人間の最たるものではないか。だからこの質問は社会におけるある位置を人々に強制するため、権力を用いることを認めるものではないか？

今日、資本家は軍隊を動員して、奴隷である労働者に仕事に帰るよう強制する。そして中央集権の力が存在するすべての社会において、反逆者を抑圧するために同じ手段が使用されることは明白である。我々はアナキストであるゆえに、こう考える。

この結論にいかにも不可避的に到達したかを我々はすでに知った。最近、次々と起こる労働争議は、我々の理論を現実を示している。この理論と実際は我々にある真理をもたらしめた。この真理は革命的行動を勇気づけつつある。これは我々には明白であるが、いまだ比較的少数の者に認められるだけだ。多くの人が労働者は支配階級すなわち富める資本家に依存するものであると信じているが、ほんの少数の者——革命家——は、支配階級こそまったく無力であり労働者に依存していることを知っている。もしも労働者が働くことを拒否するならば、彼らの

一部をして、その仲間である謀反人を射殺すべく説得できぬ以上はお手あげなのだ。

労働者のみが創造的であり、社会の活力である。それゆえ、革命をもたらし、社会を刷新せしめるのは労働者に相違ない。彼らの仕事は建設と創造だ。力弱い為政者のできることにいえば、労働者のうちの何人かを誘惑し彼らの正しい仕事を棄てさせ、明日の進歩を阻止するにすぎないのだ。

資本家および支配階級は、労働者に寄生してのみ存在することができるといふこの事実が、真に革命への発端となるのだ。

3 直接行動

直接行動なる言葉によって意味されるところを明らかにするために、一つの例をとろう。そう遠い昔ではなく、ベストの流行のような国民の一大災厄がおこると、信心深い人民は、唯一の救済策はこの不幸を除いてくれるよう神にいのる他はない、とはっきりいったものである。そしてこれらの善男善女は、科学者たちがやってきて、

病気を絶滅するために衛生予防策をやりはじめた時、非常におどろいたのである。このように、ベストへの対策としてはじめは、神がご利益を与えたまうように天にいのるといふ、間接手段であった。これはいわば、次の部屋にいる病気に通ずる非常に間接的な道だ。だが科学者はみずから病気をものに近づき、その性質を研究し、病気を絶滅させる方法を発見せんところみるのである。これが直接行動である。

今日の社会において、これとまったく同じように、人の採る方法には二つある。工場で、あるいは家庭で不満な点が出てくると、彼らのうちのある者は社会の首脳部——議会——にたいして、この欠点をなおすために権力を発動してくれと申し出る。そこへ進んだ思想の持主があらわれて、救済される方法は、その問題の性質を研究し、それに直接に治療を加えることだと明言すると、彼らはおどろくのである。この前者は、間接的なあるいは合法的な手段に信頼する人たちであって、わざわざ無駄な努力と金銭とを費して、しかも実質をあげえない人たちのた。後者はすなわち直接行動者である。彼らは、もし誰かが工場を管理するようになるならば、それは工場場でこれまで働いてきた労働者であって、政治家ではな

いということを充分に知っている。

今、議会において民衆の幸福について熱心に議論をたかかわしている政治家共の団の、実に不合理きわまることを想像してみるがいい。彼らがそんなことをしている間に、無数のパン焼き工や、大工や、洋服屋が、かの政治家共が議会を通過させた法律によって失業し、民衆の生活必需品をつくる機械や、道具や、あらゆる生産手段から絶縁されて街頭をさまよっている。法律をぶちこわし、そしてそれら他の労働者と同様、彼らの幸福のために必要なものを生産させることが、貧乏を根絶する方法である。

もし現在我々の頭上にかぶさり、我々を極度に悩ませている問題を一掃しようとするならば、富の分配のまったく新しい制度を組織しなければならぬ、ということはない、私は今、すべてを分配してしまえということではない、生産された富が、何物をも生産することのない富者のもとへ流れこんでいくのを、くいとめなければならぬ、というのだ。その流れは生産者の方へ来るように調整されなければならない。

しかし誰がその富を分配するのか？ それは政治家だろうか？ 絶対に否。それをやるのは物資の流通にたず

さわる労働者だ。今、生産労働者が分配について改変を要求する時、誰にたのまなければならぬかといえ、彼らの仲間である流通運輸労働者であって、何ごともしない政治家にはない。おなじく工場で、より良い条件——大きな倉庫、きれいな床、より明るい彩光と通風——が必要とされる時、これをやる唯一の者はだれか、それはより良く改良することを必要としている労働者だ。そしてそれをやりとげることのできる労働者だ。今日、労働者の第一の仕事は、過去におけると同様、すなわち奴隷階級は支配階級を追い払わなければならないということ、すなわち強権支配の廃止である。

これが直接行動の簡単な理論である。で、それがいかにか必然的にアナキスト革命へいくものであるかは、すでに明白である。けれどもなお我々は、いかにしてこの原則にしたがうべきかについて、さらに注意をおこたってはならない。——我々はやりすぎることをおそれない、むしろやりすぎないことをおそれるのだ。直接行動はいわゆる合法的手段とよく対抗的に用いられる言葉である。窓の中へ石を投げこむと、その人は直接行動者であると一般に解釈される。これはそうであるかもしれないし、そうでないかもしれないのである。

この言葉のもつ真の意味を論理的に、また真実たらしめるためには、あらゆる行動をして我々の究極の目的——社会革命——への直接の道程を進ましめなければならぬ。言行一致は非常に困難であるが、すくなくとも直接の過程とは何であるかを理解する少数の労働者が存在することは、きわめて重大である。ゆえにあらゆる小衝突は資本主義の最後の撃滅への一歩とされなければならないのだ。

で、くりかえしこの問題について述べてみよう。二つの階級——支配し、統治し、所有する階級と、統治せられ、財貨を有せぬ階級——いかにすれば雇主階級と奴隷階級とが存在している。

奴隷階級が不平をならし手に抜いくると、さらに条件をよくしようとして決定される前に、考慮される幾つかのすじみちがある。それは次のごとく説明し得る。

1 現在の雇主が充分に生活必需品を与えない以上、彼を放逐して新しい主人をわが奴隷階級の中から選び出さなければならぬ。あるいは、

2 奴隷階級は生産者が構成している。雇主階級はそれに寄生して食っている以上、前者はあきらかに、雇主の望む多くの食料や、あらゆるものを与える有

力を位置にある。あるいは、

3 奴隷階級は生活に必要なすべてを生産する者であるゆえ、なんら雇主階級にうかがいをたてる必要もなければ、また要求をする必要もない。奴隷階級はただ主人への供給を断って自分自身の生活を建てて上げばいい。

この議論のうち、第一は政治家の主張であって、前にのべたごとく、あきらかに誤りである以上、評するまでもなく棄てさってかまわない。これは誰が主人になるべきかの議論ではなく、どちらがなろうとそんなことは問題ではないはずだ。ただそれは主人と奴隷との本質的關係の問題なのだ。

第二の問題は非議会主義ではあるが、非革命的労働組合主義である。これは、資本家に対する戦闘のなかに労働者の真の力がよこたわっていることを認める点は正しいが、しかし両者の間になんらの改変をも提起していい点で誤っている。

もし奴隷階級が主人の店からよりよい衣食住を支給されるならば、それは奴隷が主人によってより完全に所有されることを意味している。これは革命的ではない、なぜならそれは雇主と奴隷との関係を持続することを前提

として、単に奴隷の状態の改良をこころみるにすぎないからだ。

第三の問題はもちろん革命家の論議である。そのやり方は第二のものとは一致する。だが労働者のまずやらなければならぬことは彼ら自身で食い、住み、着て、そして教育することであって、よりよき主人を作るために彼らの精力をついやすことではないと主張する。資本家への供給を断ち、労働者のために生産品を保持することは革命闘争の主要点である。

あらゆる産業論には二つの——ただ二つの要素がある。一方において工業財産といわれる工場、倉庫、鉄道、鉱山等々。他方においては労働者だ。この二つのものを結合することが、すなわち革命の完成である。なぜならそれによって新社会は建設されるであろうからだ。

資本家と主人階級とは一般に労働者を工場や倉庫の外側に置くことができる間だけ、その地位を保持しえる。というのは、それらの内側には生活の手段があり、人民は命じられた条件にしたがい、利潤を生み出すというところがろうじて了解された上でのみ、それらを使用することを許されるのだから。

ストライキをおこすのは単なる反逆であり、本質的に

革命ではない。たとえ徹頭徹尾それがおこなわれたとしてもだ。支配階級の支配から自由になり、平等の条件を維持し、そのたた中で働くことこそ革命家の真の目的である。

直接行動はだから、この明確な革命精神をもって、労働者自身が生産手段と生活必需品を確保し、そして自由の原理にしたがって産業を再組織することを意味する。

直接行動の原理は、労働者を安易に救うということではない。それは実に、我々自身の知識と力を除いては何者も我々を救うことはできないという、おそるべく簡単な事実の認識である。我々労働者は創造力を持っている。なぜならすべての食物、着物、住居を造ったのは我々ではないか？ そしてそれらに不足しているのは、たしかに我々だ。これについて政治家共は何をなすか？ なにも、絶対になにごともなさない！

なんのために我々の全生産物を雇主階級に手渡し、そのうちいくら返してもらえるかについて、はてしなく紛争をつづけているのか。我々はこれに代えて、資本家への供給を停止し、我々の産業を上からではなく下部の根源から再組織し、やがてすべての生産物は支配階級ではなく、生産者の手に渡るようにしなければならない。

これが直接行動の意義であり、無政府主義である。

しかし、つめたい理論によって紙のうえて革命を完成させることの容易さにくらべて、現実の産業生活の中に革命をもたらすことには困難さがともなうのだ。我々はみずからの役割についての労働者の理解の不足や、この不足をさらに広げようと、つねにたくらんでいる政治家の邪智とたたかわなければならぬ。加うるに権力階級ははつきりと変革を阻止する用意をしている、彼らの唯一の論理——暴力をもって。だから、たたく適用された直接行動が、現実のA&Bの略取と工場の占拠を意味していると理解するのは重大なことである。我々は先に述べた三つの説明のうちの第二にしたがって——すなわち資本家階級にむかって、よりよき状態を要求する——当分の間我々の直接行動の武器を使用することで甘んじなければならぬだろう。

しかしごく近い将来、アナキストは労働者たちの戦闘部隊を作るであろう。そしてそれは大産業のあらゆる叛乱に真の革命的性質を与えるであろう、これはけっして過大な望みではない。資本家と同様に労働者も、たとえばストライキにおいて充分計画を練りさえすれば、スト参加者を経済的に護ることも可能であると知りはじめ

いる。このような計画はパン工場の占拠を必要ならしめる。これこそ革命の第一歩である。

簡単であり、しかしすばらしいこの現実の問題にくらべて、いかに政治家の約束の不誠実、醜悪であることか。投票箱を通じて自由を勝ちえんとする考えの、いかに馬鹿らしいことか。このように愚劣の中に安住しつつ、衣食住について論じている、あわれな為政者はただこの現実を侮辱を加えるのみだ。彼らが演壇に立って意味なき演説をする議事堂を建てたのは労働者であった。そして議員らを家に住ませ、養っているのも労働者である。

我々自身の疑問とためらいをのりこえる時、我々の目の前にあるのは何か？ 死に顔している敵の姿が逆に我を励ます。なんと奴らは絶望していることか！ 警察官の手にする鞭は、労働者が作ったのではないか？ 彼らの不格好な制服は、給料不足の女工がチクチク一針ずつ縫ったのではないか？ 兵隊のライフル銃は主人階級——徹底的に、彼らはあわれなる寄生虫だ——によって絶対的に作られはしないのだ。

抑圧の道具は、我々が彼らに供給したもののものだ。そして我々は毎日毎日彼らは食を与えて生かしているのである。だからどうしても、変革が来なければならぬの

だ。彼らはよかれあしかれ無力である。アナキスト革命は下から——社会の活動的な部分、すなわち働く者による動乱によってのみ、もたらすことができるのである。

4 新社会

「主人と召使い！ 上にたつ者は上に、下働きは下に！ それは過去においてそうであったし、将来もそうであろう。人間の天性を変えることはできない」

このようにいうのは容易なことだ。そして、もし諸君がみずからの境遇に甘んじていられるならば、非常に幸福である。だが無論それは馬鹿げたことというべきだ。

下級動物から発展してきた人類の歴史のうち、有史以前の穴居人との類似を誇る者は現代人にはほとんどない。事実において人類の性格は二つの世界、二つのことなる時代ではけっして同様ではないのだ。主人と召使いの関係について、歴史の比較のみじかいある期間、非常な虐待がおこなわれたので、今日多くの人たちは、これが過去の残忍な奴隷制度と同じものであるということを認識するのが困難になっている。

しかし、やがて八時Vは主人と召使いの関係をうちやぶり、人間と人間との親愛な関係にうちをおすであろう。このような関係に改変する、最後の爆発こそアナキスト革命である。

このアナキスト革命とはなにか？

我々は充分にこの問題に答えることができる。我々はいま前章で語ったところのすべてに同意したとしよう、すなわち我々は資本家ならびに支配階級に盗奪されているということだ。そこでは反動そのものである政府を改革することについて希望はもてない。そして資本家および統治階級はまったく我々に寄生しているのである。「しかし我々に何ができるのだ？ 今日この制度を破壊して我々は何をもつのか？ 同様なものに置きかえられるまでの、いたずらな混乱があるばかりじゃないか」と反問されるかもしれない。ある意味でそれは真実である。だが我々への反証とはなりえないのだ。

今日多くの奴隷制度が存在するのは、人間の思想の内部に巢食う奴隷根性によるのである。

そこで、もしも大暴風が国中を吹きはらい、そんな制度や指導者共をすべて打ち倒したとしても、なお奴隷根性を奉持する人たちはふたたび元の制度の復興にとりか

かるにちがいない。反対に、もしこの大暴風が奴隷根性をぶちやぶった民衆自身の運動の力を探るとしたら、それは旧態を回復せずして、新しい革命的なものを作り代えるであろう。

「しかし、どのような方針で？」 この疑問は当然である。すくなくとも新社会の組織の輪廓の基礎的な考えをつかまないと、破壊と建設に関する我々の力を知らうとすることは無益なことである。

我々は新社会を、古い材料から作りあげなければならぬ。今日の制度——議会、市町議会、工場等——はすべて政府的原理の上を走っている。それらすべてのものの構造の中にある、政府的要素——過去の残骸——は切り棄てられなければならない。我々の使命が破壊的であればあるほど、真の社会生活の建設のために採らねばならない必須の第一歩を我々は知るだろう。

新しいものは、ただ古いものの発展であるから、今、革命の方法を理解するのにもっとも容易なやり方は、革命が現存制度とともにいかなる処から出発し、それらがいかになさんとするかについて知ることから始まるべきである。たとえばパンの製造や供給のごとき問題をとってみよう。その今日と革命後を検討してみよう。

パン焼き職人は毎晩おそくまで、おそらく他人に指図されてパンを作っているのである。彼はどんな材料が身体によくないかを知っている。しかしそれは彼が口をはさむことではない。彼はただいわれたとおりに行っていない。責任は彼にあるのではなく、その制度にあるのだ。

このような状態で彼は労働し、健康はそこなわれる。彼は他人に隷属して生活しなければならぬ。そして労働の成果の多くの部分を盗まれる。さらにもっとも驚くべき事実は、製品であるパンを供給することに關して、民衆の必要を考えていないことだ。そこで多くの人たちは、この生活必需品に不足する。そしてもし彼らが一片の堅パンを盗んで必要を充たす時、現社会は彼らを獄に投じて錠前をかけ、とじこめる。それらの事件をより一層正しく、要領よく解決することは現社会にはできないのだ。

以上我々は今日の社会制度において、その強権的組織形態による罪悪をいくつか証明した。

では、いかに救済するのか？ 「市議會で。そして我々の一人を議會へ送りこむことによって」たいていの社会主義者や彼の仲間らはこういう。しかし約束はたさ

う。路上で腹のへった者は、必要に応じてパンの目録をとりあげ、ストライキ労働者たちの所有となっているパン工場に行ってパンをとるといふことは容易に考えられるではないか。またこの目録にしたがって、必要なだけの量を焼いてもらおうと考えるのは不可能だろうか？ この場合パン焼き工たちは、民衆に必要な量のパンを送りだすにはどれだけの車や人がいるかを知っている。そしてもし彼らが輸送にたずさわる人たちにこの事情を知らせるなら、パン工が仕事をはじめるように、運輸労働者はその仕事に全力を注がないだろうか？ 物が不足した場合——もし作業場にもっと椅子があるとするなら、同様に大工はパン工たちに椅子を供給しないだろうか？ もし機械が必要だという通知が機械工のもとにとどいた場合彼はそれについて検討しないだろうか？ その機械工はそれを調達するため、すぐ製図工にうったえるだろう。機械を製造するため、鋳造工場にうったえるだろう。一方では製図工は用紙を製紙工に依頼する。鉛筆を鉛筆製造工場の労働者に依頼する。鋳造工は鋳炉工にうったえ、すると鋳炉工は鉄鉱石と石炭の必要を鋳夫に申し立てる。このようにして無限に連続していき、部分と部分がうまく平行して、たがいに依頼し合うことによって保持

れない。それはよくて労働状態の若干の改良や階級対立の緩和、ならびに多量のパンの生産が決定されること等を意味する。だが議會は、資本家や支配階級に与えるより以上に、労働者に利益を与えることはないであろう。否！ 革命的変革は権力者がかわることによってではなく、支配権力を打倒することによって、もたらされねばならない。未来社会におけるパンの供給は、必要に応じて、直面した必要として、下から発意されるだろう。それはけっして上からではないだろう。

アナキスト革命のもたらす変革とは、どういうものだろうか？ 自由社会にあつてはパン焼き工がパンを焼く時、こうすれば良いパンが造れると彼が信ずるやり方にまかせるであろう。彼は自分がその仕事に適しているかどうかを判断する状態を得なければならぬ。彼は労働の成果を盗まれることなく、そのかわりに社会生活の充分の利益を享受するだろう。

最後に、パンの供給はすべての人が必要とするだけ、そしてすべての人が好みに応じて満足するようになされなければならぬ。

労働者の上に、大きな変動がやってきたと仮定しよう。労働者は直接行動をとり、それは彼を自由人にするだろう。

されていく。必要がそのすべての動力である。

主人は誰か？ 誰がこのすべてを統制するのか？

否！ 誰もすこしも統制しはしない。それは下から発し、けっして上からではない。有機体のごとくこの自由社会は発展していく。単純な結合から複雑な構造にむかつて。パンの必要・飢え——いいかえれば生活のための個人的努力すなわち、もっとも単純で、もっとも基本的な形態——は我々が見知るように全社会の機関を動かすのに充分である。社会は生きんとする個人の努力の結果であるといえる。誰がなんといおうが、これに反対はできないのだ。

同様に、あらゆる自由な個人がパンや機械やその他すべての生活必需品を造るために、彼の兄弟と連合するのだ。それは生活のよるこびへの彼の欲求以外のいかなる力でもない。ただ生活欲求によってのみ駆りたてられているのだ。

そのように各組織は自由であり、独立している。そして他の組織と合意によって協同する。なぜならそうすることによって自分自身の可能性を拡充するからである。そこでは集中的国家に利用されたり、また命令されたりはしない。

完全なる構造は、各部分が全体と密接に関連していることよって保たれる。我々がこれまでみてきたように、パン焼き工には大工や機械工が必要だ。そしてこれらの労働者は、もし交互に関連し合っている他の分野の労働者によって原材料が供給されないならば、仕事ができなくなってしまうだろう。このような状態にあって機械工がパン工に命令しようと考えたり、またはその運営のかたがが政府とひとしくなるならば——すなわちそれらの産業のすべてに主人があらわれて生産と交換はじめ、それがつねに良き整理と良き秩序を保つと考えるなら、それはなんと馬鹿げたことであろう。生産を支配する者は例外なく生産物の大部分を取りあげてしまふ。これが政治家共が支配は必要だと強弁してやまぬ理由である。

古い奴隷の本能を精神からぬぐいきれない多数の労働者が、いまなおいかに従順に政治家にしたがっていることか！

将来社会の構造はけっして中央集権であってはならぬ。密接に相互に結合し、つねに発展しなければならぬ。それは自由と相互合意を織りこんだ、人類社会の最初の代表的制度となるだろう。すべてはその中で、必要の直接の結果として発達し、あるいは没落する。

人はパンのみで生活することはできない。そして我々の新しい社会では、むきだしに必要なみならず、高等教育にも場所を与えるべきであり、そうでないなら、その社会は駄目だという議論があるかもしれない。この例について、これ以上くわしくのべるなら、すくなくならず長つたらしいものになることを、許していただかなければならぬ。しかしその価値はあるのだ。なぜなら、もしその説明がなされるなら読者自身が自己のアナキズムの原理——読者はこの時すでにアナキストであると私は確信する。——を労働者の組織に適用しえるかを、この説明から知るだろうからだ。

労働者の組織の大部分のものは、資本主義と権力に対する闘争を目的とするとさげびつ、資本主義制度のもとにあるゆえ、彼ら自身指揮され支配されている。革命への次の一歩で、それらの組織を破壊しなければならぬ。その時に彼らは八指導者Vの支配から自由となるであろう。そして自由社会を目指しての実践の第一歩はすでに開始せられている。

説明を元にもどそう。パンの製造のかわりに我々は芸術の例にとろう。この問題について我々と同様に考えている人はきわめてすくなく、大部分の人はまったく考え

その社会は全人類の要求に應ずるであろう。人々の最大の希望に應じて、機敏に毎日の必要を充たしていくだろう。変革形態は人類の過去の表現となるであろう。

* * * * *

無政府主義はしばしば、それは美しい夢だが、実現不可能だという理由で掃きすてられる、あの政治家らによつてだ。私がこれまで、できるだけ具体的に話してきたのは、これに対するためである。いま、我々の新社会に移行するとして、それは越え難いことではないけれど、困難なことにはちがいないのだから、私はまず第一にそれについて詳しく述べることにしよう。

パンの製造を例にとつて、異なる意見の入る余地がない主題を私が選んだといわれるかもしれない。すべての人はパンが必要だということと一致する。パンの製造の仕方についても、そのとおりだ。だが民衆が複雑な問題にぶつかってはなはだしく意見を異にした時、君なら、上からの支配や法律による以外、いかにすか。

ない。もしわれわれの自由合意の原理が、各人を満足させるにたる、芸術のある形態をつくり出すことができるとするなら、(より単純な場合においてすべてが明確にあらわれるであろうことは論をまたぬ)我々は今日存在しているものうちから、拾いだしてみよう。そしてそれを政府の影響からとりのぞこう。

美術館は今日、大都市の団体によつて一般的に経営されている。誰でも絵画を買うためには金を支払わなければならず、その値段は税金によつて高められている。一方で多くのものは絵画に関してまったく関心を持たない。否、あるものにいたってはそれらを不道徳の行為とさえみる。今日の美術のしくみは、外部に対してはまったく特徴のないものであり、そして内部では実にいいかげんである。

自由社会における芸術会合は、まさにパン工場のごとく芸術の欲求に應じて発達してくるであろう。芸術を愛する人たちの団体は自然に会合し、彼らのプランを議論するにちがいない。それは愉しい仕事となるであろう。彼らは、それらに同情する気持のない人たちに援助を強制しはしないだろう。このやりかたにしたがえば、その団体の大きさが、その内部にあつめられた芸術的関心の

累積をあらわすだろう。その団体の芸術的要素をあらわすだろう。

しかし芸術家のあいだには、なにが真の芸術であるかについて多くの異なる意見がある。もしこの団体が組織の内部に八多数決Vの規約をもった厳格な機関になるとしたら、革新的な芸術意識の人たちが、いかなる方法によっても世に出られないにもかかわらず、平凡な会員によって書かれたこの一派の絵画のみが壁にかかげられるだろう。

この場合、もしも我々が統治の観念を完全に切断するならば、組織の内部に自由は保たれ、まさに我々が団体を作った、その根本が自由であったように、自由はその存在を持続させる。そして我々はある特徴に気づく、それらの芸術家たちが会合した時、彼らはけっして多数をもって少数をおさえこむようなことはしないだろう。

一つのビルディングの設計図があるとすると、全員は会合し、彼らの必要が具備されているかどうかを検討するだろう。そのうち少数者は、多数の仲間と同意する前に、ビル各室が意図どおりに作られているかどうか詳しく調べる。

ここでもし多数と少数の二派が論争において一致でき

このアナキスト革命こそ労働運動がかくも久しい間、目指してきた、その革命だということがいまや明らかでないか？

もっとも野蛮な法律なるものが存在したにもかかわらず労働者は資本家の残忍なる搾取にたいして、まず第一に保護的な連盟を型造った。今日もまた同様の抗争がある。坑内で労働者をなぐり倒し、工場へ通う者に警棒をくらかせる政府の代表者がいるのだ。そして一方には政府の命令に服従する、飼いなされた官服の一団がいる。——彼らは何も創造しない。彼らの最高の徳は従順ということだ。他方には労働者の雑多な隊伍がある。その心臓は叛逆で、その頭の中は理想で充ちて、無限に大きく、美しいあるものを創造しようとする力——だがその力の莫然たる意識はゆがめられ、不完全なものとして、世界の富を作ったのは彼らであるのに。

この大闘争の原因が何であるかを疑うことができるか？ 労働者軍に対して、わずかのあまりもののパン切れでケリをつけようというのか？ 飢えているより、たとえすこしでも働くことを許してもらうだけで充分なのか？ 政治家の新しい団体が議会に座をしめることで平和は来るのか？ それらのあらゆるものにも増して偉大な

ないならば、彼らは本当にはなればなれに分裂してしまふ。そして二つの異なったビルが作られるだろう。しかしここで面倒をおこすのは好ましいことではないし、彼らは面倒をおこさないだろう。このように自由な組織の方法によって二つの意見が表現されるばかりではなく、多くの異なった種類の絵画が、ちょうど芸術における異なった思想のごとく千差万別であろう。ただし彼らがその隣人から離れては一人で充分活動できず、あるいはそれほどの差違もないという理由で和解した場合は除いてである。

ここでふたたび我々は真に選ばれた組織に出合う。まさにパンが個人の必要の結果であるごとく、人間が生きるために社会が発達するのを見る時、この必要が直接にパン焼き工や、パン焼き工場の背後で力を発揮する場合、飢餓が存在しえると考えるのは不可能であることを知った。

そしていまや人間にとっての生活必需品を分配するようになつたなら、我々は古風な権力の観念の残りかすを根こそぎにし、簡単に、また完全に必要品を供給しえることを知った。そして主人と召使とはなくなり、人間はすべて等しく自由になるのだ。

もの、過去と未来との間の長い戦争、それは自由と奴隷との間の大戦争である。一方は死せる過去としておとろえ、他方は若い理想の強大な発育である。

ここに一般民衆のこの偉大な闘争を理解する唯一の方法がある。それは単なる支配権の改造などを採用することではない。両方がこの闘争の意味を充分に実感するまで闘いはつづくだろう。そしてその時最後の闘いを休止させる何ももない。それこそ政府を打倒することであり、自由を建設することだ。

これがアナキスト革命の仕事である。それは世界の富のカギを握っている統治階級の破壊を意味する。そしてその富を作った人々のために世界の宝庫はあけ放たれるであろう。警察官の警棒や、王や兵卒の馬鹿げた格好の衣服は権力が正義に代えられ、人格と勇氣のためにとって代えられる。学問ある裁判官と法律家らいかめしい人たちののしりや智者の誇りもいまは無益だ——すべてそれらのものが、まったく無用となる。そして我々の市街のうえに太陽がのぼる時、かがやく巨大なかがり火の中に投げこまれるだろう。そこで貧しい人たちは、なかば餓死した身体と気力をあたたためるだろう。圧制の仮面は終りをつけ、滅亡し、世界を保持していた圧制の

すべては建設の力——労働者の叛逆によって破壊される
 だろう。野蠻な力によって支配せられた社会組織は、新
 しい自由社会に位置をゆずる。そして自由社会を建設す
 る人たちの自由な協力によってその存在を維持し、発展
 させるのだ。

そしてそれがすべての終りか？

否！ それは我々の未来の偉大なる仕事の基礎である。
 なぜならば無政府は人類進歩のための、もっとも必要不
 可欠の状態だからである。

(終)

アナキスト革命

定価 一五〇円

一九七五年一月一日 新訂版刊行

編集所 東京都大田区西蒲田七―六一―八

エンリコビル 大島英三郎方

電話 (〇三) 七三五―一二四六

郵便番号 一四四

発行所 群馬県伊勢崎市中町和田 大島英三郎方

黒色戦線社

電話 (〇二七〇) 二四―〇七七六

振替口座 宇都宮一〇一五

郵便番号 三七二

新訂版あとがき

本書は刊行後ただちに発売頒布を禁止された名著
 です。訳者は農村青年社治安維持法違反事件で投獄
 されました。この新訂版は若い人達にも読みやすく
 するために当用漢字・新かなづかいに改訂しました。

大島 英三郎

一九七四年一月二八日

〔附録〕 読売新聞「農村青年社事件」関係号外について

(新訂版刊行者)

ここに附録として添付した読売新聞号外によって読者は、昭和戦前期の主要なアナキズム革命運動のひとつ
 であった「農村青年社」の理念と実践についての概略を理解されるであろう。本パンフレット「アナキスト革
 命」の訳者・鈴木靖之は、この農村青年社の運動において主要な役割を果たしたのである。読者はそれにつ
 いても又、鈴木靖之の略歴等と共に、この号外から読み取っていただきたい。

なお、本事件についての昭和12年4月12日長野地裁における判決は次の通りであった。(控訴については不詳)

懲役四年	(未決通算二〇〇日)	鈴木 靖之
〃 四年	〃	宮崎 晃
〃 二年六月	〃	八木 あき
〃 二年	(一〇〇日)	伊藤八十吉
〃 二年	〃	島津徳三郎
〃 二年	〃	鷹野原長義
〃 一年六月	〃	増田貞次郎
〃 三年	(二〇〇日)	星野 準二
〃 二月	〃	田代巖三郎
〃 二年六月	〃	望月 治郎
〃 二年	〃	南沢製袋松
〃 一年六月	(一〇〇日)	和佐田芳雄
〃 一年六月	〃	松藤鉄三郎
〃 二年	(二〇〇日)	山田 彰
〃 二年	〃	三上 由三

(治罪法関係)
 (犯人いん匿)

(執行猶予四年)

(執行猶予四年)

